

LEADERSHIP CHALLENGE

大隈塾LCLレポートvol.02

第2回大隈塾リーダーシップ・チャレンジは5月6日（土）7日（日）、鴨川自然王国で田植えを行いました。今回の目的は、

- ・五感を取り戻す（特に足の裏と手の指先の感覚、嗅覚、聴覚、味覚）
 - ・自分が食べるものを自分で作ってみる（「食料自給力」をつける）
 - ・ライフスタイルを見直してみる
 - ・身体を動かす
 - ・チームビルド
 - ・大学生たちとの交流（早稲田大学大隈塾ゼミ生たちが参加しました）
 - ・意識的にのんびりしてみる
 - ・自分の「仕事」を探してみる（「仕事」＝誰かやどこかの役に立つこと。「稼ぎ三割仕事七割」）した時間を過ごす
- にありました。

大隈塾の四つの特徴である、
「ソーシャルネットワーク」
「哲学、信念、世界観」
「リーダーシップ」
「心技体」

のうちの「心技体」にあたります。

知識と経験の量に反比例して、体力と五感が衰えていきます。自然の中で、水と空気と土に触れながら、もともと備わっている感覚を取り戻し、左脳（＝論理性）と右脳（＝直感）と体幹を鍛え、闘うビジネスパーソンとしてのバランスを整えます。

また、あえてコンテンツとコンテンツの間の時間をゆったりと、アイドリングタイムをとりました。何もしない時間を過ごすことで、時間の感覚を意識してもらいながら、自分でコミュニケーション（大隈塾メンバーと鴨川自然王国）に貢献するような作業も自主的に見つけていただきました。

5月7日（土）

ワークショップ：田植え

テーマ：チームビルド

10:30に東京駅八重洲口に集合し、専用バスに乗ってアクアラインを通過して鴨川へ。「日本棚田百選」に選ばれている大山千枚田を左に見ながらさらに山を登り、12:00ごろに歌手の加藤登紀子さんが運営する鴨川自然王国へ到着。山小屋に荷物を置き（女性はログハウス）、着替えを済ませて持参した昼食を、これから苗を植えていく田んぼを眺めながら食べました。

学部の大隈塾ゼミの学生たちも合流し、総勢34名が準備完了。かなりぎこちなく水田に足を突っ込み、よろよろしながら態勢を整え、王国の藤本博正さんと首藤武宏さんのご指導で田植を始めました。

社会人と学生たとの混合6チームは、最初こそゆるやかなペースでしたが、次第に慣れてくるに従い、苗を植えていくともスムーズに動くようになり、120分ほどで小さめの田んぼ2枚、10アールほどの田んぼに苗を植えました。

成果予定は8俵=480kgのコメになります。1人あたりのコメの年間消費量は約60kgですから、8人分にあたります。

夜はバーベキュー。気温も落ちてかなり寒くなったので、焚き火を囲んで丸太の椅子に座り、お酒を楽しく飲みながら王国産の肉や野菜を焼いて食べました。



【受講生のレポートより】

=====

農のある暮らしに触れたことで、感受性の拡がりを感じました。自給自足の生活で作った食べ物は美味しく、体の中で自身の力になっていく気がしますし、敢えてゆっくりした時間や空気を感じることに大切さを感じました。都会は綺麗に整備されていて、生活はとても便利だと思いますが、整備されすぎていて、何も感じなくても生活できるようになっていると思いました。

=====

自分は田舎には何も無いからと上京し、更に刺激を求めて世界をと進んできたので、ナイーブに感動することはできませんでした。一方で、ロバート・ケネディの「幸福はGDPでは図れない」との言葉や、チベット仏教の下で精神的な充足に力点を置くブータンの「国民総幸福」の考え方のように、農村・田園風景の美しさ、コミュニティの結束、人と人のつながりなどといった、「GDPでは図れないけど、守るべき価値あるもの」がここには存在していました。経済成長、物質的豊かさ、数字を第一目標とする多くのリーダーたちへのアンチテーゼを投げかける場所であるところ、この点についても議論を深められたらおもしろかったかもしれません。

=====

田植えの後、別側面から考えてみたが、(少し考えが飛んでいて、且つまとまっていないが)都市での生活がオゾン破壊や水質汚染などわかりやすく自然環境に影響を及ぼしているように、田んぼについても人間が土地を切開き作り出したものであり、都市よりは全然大きくないが、自然に対して少なからず影響を与えているであろうことが気に止まった。私の所属する会社の企業理念は「人と自然と響きあう」であるが、掲げている「自然」をどのようなレベルで捉えるべきで、「自然と響きあう」とはどのようなレベルで響きあうべきか(企業を越えて大きく考えた時、自然に対してプラスとは何か? 企業活動がまったく自然に影響を与えないことはないが、どのような影響までを許容? して考えるべきか)を整理し、日々の企業活動をしなければならぬと思った。

=====

今回、あえて意識して課題の田植えに色々な感覚を使いながら作業しましたが、きっと日常でも意識することで、もっと日々眠っている感覚を使って、色々なことを感じ取れるのだろうと思いました。たまに、こういった機会を持って、感性を研ぎ澄ませる時間を定期的を持つことで、日々の生活の色も変わり、同じ都会的な生活だとしても、様変わりするのではないかと考えました。

=====

チームで声を掛け合って何かを実施することは、実生活の中ではほとんど無い状況であったため、横の進捗状況を確認しながら作業を進めていくことが非常に勉強になった。

=====

学生の方が、思ったことや感じたことを率直にすぐに発言しているのを聞いて、社会人がいかに感じたことをそのまま発言するのを抑えて、コントロールしているのかを実感した。田植えや山登り後のということもあり、普段では考えられないほど、食事をたくさん食べた。もちろん、お米やおかずが美味しく感じられたこともある。

5月7日（日）

翌朝は7:00から、近くの「がんこ山」（通称）に。20分ほどで頂上に到着する超ミニ山登りです。頂上はほんの一人分の広さしかないので、交代交代記念写真を撮っていました。

下山しての朝食は、信じられないくらい大食になっていました。朝からの運動がそうさせたのか、あるいはシンプルにコメが美味しかったのか。ご飯茶碗3杯はみなさん食べていらっしゃいました。

9:00からはジャーナリスト高野孟さんの講義「里山暮らしという21世紀的ライフスタイル」。著述家の内田樹さんのコラムから「今だけ・カネだけ・自分だけ」という世の風潮に抗うように田舎暮らしを始めている事例を紹介。ご自分の移住体験によって五感が蘇ってきたことなど、ライフスタイル変えることによって仕事にも生活にも充実感を増すことができる、と。しかし田舎暮らしをしながらなぜ仕事ができるかという、それはITの進歩であり、情報はどこにいても入手でき、コミュニケーション手段も多様になったことによって、「田舎暮らし、都会でも仕事」ということが可能となった。

ここで「情報には2種類ある」、informationとintelligenceで、informationをいかにたくさん知っているかの教育からはintelligenceをどう構築するかビジネスセンスはなかなか磨かれないこと、intelligenceには「直感力・想像力・論理力」の三角形を築き上げることも必要だ、という内容でした。

働き方改革は時短ではなく、生産性を上げることだと改めて認識できました。



講義・ディスカッション

講師：高野孟氏（ジャーナリスト、鴨川自然王国）

テーマ：「里山暮らしという21世紀的ライフスタイル」

●内田樹の田舎暮らしへの思い

5月5日の「日本農業新聞」に哲学者の内田樹が「“地方創生”の愚／田園回帰を迎え導け」と題したコラムを執筆している。

▼日本社会は視野狭窄状態に陥っている。国の政策も財界の志向も「今だけ・カネだけ・自分だけ」という形容の通り、長期的な国益についての配慮を欠いている。そのため……若者たちは都市部での賃労働者という生き方を見限って、新しい生き方の選択肢を模索し始めている。その1つが地方回帰だ。

▼おそらく年間数万人が都市部を離れて農村に向かっている。地方移住した若者に理由を聞くと「何となく」と答える。その点が私には興味深い。……自分の内側から発生してきた「思い」に突き動かされて、何かを求めて都市部を離れた。

▼若者たちの地方移住志向は、政府の「地方創生」とは方向が違う。地方創生政策の内実は「地方切り捨て」だ……。

若者が「何となく」——ということは、確たる見通しもなく、ましてや身分や収入の保証もある訳でもないのに、決然というか平然として都会と決別するという、言わば大冒険に打って出してしまうことに、内田は感応し、そこにむしろ希望を見出しているように見える。

しかもその数、おそらく年に数万人。マスコミにはたまにしか出てこないが、例えば同じ5日付の日本農業新聞の別の面には、「養蚕に未来懸ける若者相次ぐ／『伝統文化俺が守る』」という記事が出ていて、群馬県富岡市の富岡製糸場がユネスコの世界遺産になったことをきっかけに、国産シルクを守ろうと、地域興し協力隊の若者が養蚕に取り組み、県も養蚕学校を創って支援し、既に1人が養蚕農家として巣立ち、さらに4人が続こうとしているという。

こういうことが実はたくさん起こっていて、これが時代の切っ先であると思う。何の切っ先かと言えば、明治維新から150年、欧米に追いつき追い越せ、ひたすら近代化を求めて「富国強兵」の道を駆け上るように生きてきた時代があって、その原理が、突き詰めて言えば、「今だけ・カネだけ・自分だけ」だったのではないか。どうもそれは違うし、時代遅れであるということは分かるが、かと言って次の時代の原理が何であるのかは誰も指し示してはくれない。だから「何となく」なんだけれども、しかし自分の親たちまでのこれまで価値観の延長上では生きられないということだけははっきりしているので、都会を捨てられ

るのだろう。

今週発売の「AERA」の巻頭特集「老後は怖くない」でも、トップのインタビューは全身ガンに冒された樹木希林で、次の記事は「中央線に乗って新天地／成りゆきだっていいじゃないか」という、ヒョイヒョイと山梨県に移住してしまった人たちの物語である。

●私が鴨川に移住して10年経った

私自身、この自然王国からほど近い森の中に移住して、この5月でちょうど10年になる。

今から数えれば23年も前のことだが、私たちが50歳になった時に、この自然王国の主で私と同年の昭和19年生まれ故・藤本敏夫と「おい、俺たちもあと10年で還暦だよ」「ほおーっ、考えたことなかったよな」「還暦と言えば折り返し点、そこからが人生二毛作目に入るとのことだ」というようなことを語り合ったのがきっかけで、同年生まれの「一休会」という飲み会を結成して、そのうちの何人かと共に「鴨川で藤本が何をしているのか見に行こう」と言って何人かで訪れたのが最初だった。

それで月に1～2回通って、1泊2泊して田畑や森林の作業をするようになって、それまで50年間、東京・埼玉・横浜の首都圏の大都会以外に住んだことのなかった私の価値観が大きく変わった。価値観というような大袈裟なことではなく、例えば空気。ここへ来るととにかく空気が美味しい。東京に戻ると空気が臭くて、「えっ、俺はこんな空気を50年間、知らずに吸っていたのか」と思い知る。ここへきて汗を流して働いて、夕方ビールを飲むと、新橋のビアホールで飲むより倍くらいも美味しく、素直に感動してしまう。ご飯も野菜も、これまで何の考えもなしにただ単に腹を満たすために餌のように食べていたけれども、ここへ来ると米が旨いし、野菜が甘い。

魚もそうで、築地経由のものを都内の高級料理店で食べるより、ここで今日上がった地魚を漁師料理風に荒っぽく叩いただけのものが5倍も旨い。そういうことの連続で、私の眠りこけていた感性、感受性のようなものが一遍に目覚めてしまい、「何となく」というよりはもう少し理屈っぽく——つまり、明治以来150年かけて日本人が追い求めてきたキラビヤカな都会文明というのは、すでに頓死状態に陥っているのではないか、という直感的な時代感覚に、たちまち辿り着いた。体の全細胞がいきなり目覚めたのだ。

それで、私は藤本に、「俺も還暦になったらこの辺に引っ越してくるから」と約束した。が、彼はやがてガンに冒されて2002年の夏に亡くなった。その時私は、中国の内モンゴルに小さな団を率いて旅行中だったが、知らせを受けて1人舞い戻って、葬儀で弔辞を述べた（加藤登紀子編「農的幸論」＝カドカワに収録）。そして、約束通り、還暦と共に荒れ果てた山林を手に入れて家を建て、引っ越してきたのである。

以後、「半農半X」という言い方に倣えば、「半農半電腦」生活とでも言うのだろうか、棚田保全クラブに参加して自分らで食べる米の基本は確保し、小さな畑をやり、森林の手入れをして薪ストーブが主暖房となる暮らしを営みつつ、これまで42年間書き綴ってきた情報誌「インサイダー」をメルマガサイト「まぐまぐ！」を通じて毎週月曜日に配信することを続けている。

●インフォメーションとインテリジェンス

若者たちの「何となく」も、私の、もうちょっと理屈っぽいとは思いますがしかし田舎の空気や米や野菜や魚を全身で「旨い」と感じる事が基本となっている移住の仕方も、要するに「直感力」の賜だと思う。合理的な近代化思想に慣れた人は、いちばん大事なものは論理力だと思い込んでいて、論理的にきちんと説明がつかないことがすなわち（文字通り）合理的なのであって、それに従って世の中は組み立てられるべきであるということになると、結局「今だけ・カネだけ・自分だけ」に溺れ込んで行くのだろう。

私は、早稲田で13年度まで担当していた高野ゼミ「インテリジェンスの技法」で、いくつかの大事なことを講じてきた（と自負している）。

第1は、インテリジェンスとインフォメーションの区別と統一。広辞苑でインテリジェンスを引くと「(1) 知能、知性、理知。(2) 情報。」となる。インフォメーションを引くと「(1) 情報、報道。(2) 受付、案内所。」と出る。

ここでどちらにも「情報」という訳語が出てくることが問題で、つまり、日本語ではインテリジェンスとインフォメーションの区別がつきにくい。ところが英語ではその区別は厳然としていて、例えば駅やデパートの「案内所」をインテリジェントと呼ぶことは出来ないし、米CIAをセントラル・インフォメーション・エージェンシーと呼ぶことはあり得ない。

ところがこの両者が別物で、まったく接点がないのかということそんなことはなくて、インフォメーションは「第1次情報」、すなわちすでに起きた出来事についての事実情報であるのに対して、インテリジェンスは「第2次情報」。それらのインフォメーションを出来るだけたくさん集めてそれをいろいろな手法を駆使して解析し、この背景にはもしかしたらこういう時代変化が潜んでいるのではないかなどと仮説を立ててそれを検証し、物事の本質に迫っていきこうとする姿勢である。

比喩的に言えば、インフォメーションは収穫されていくつもの籠に山積みになっているブドウの房である。それをいくら食べても陽子とはないので、粒を選んでワインを作り、それを蒸留してエッセンスをポタリポタリと抽出して、琥珀色のブランディが生じる。それがインテリジェンスである。

●三角形のグルグル回り

このインテリジェンスをどう鍛えていくかという時に、私が提示してきたのは「インテリジェンスの三角形」というもので、これは「直感力＝体？＝するどさ」と「想像力＝心？＝しなやかさ」と「論理力＝頭？＝たしかさ」で、これが右回りでも左回りでもグルグル回ることが状オズなのが「インテリ」である。

例えば、ベートーベンが朝に森の道を散歩していて鳥のさえずりを聞いてハッとひらめいて、交響曲第6番「田園」の出だしのフレーズが浮かんで来たとする。聞いたのは鳥の声で、それに直感的に反応してしまったことが起点であるけれども、その直感的反応力が相当に鋭敏でなければそれでいきなり出だしのフレーズが湧いてしまうということにはならない。そのフレーズが媒介役となって、たぶんベートーベンは想像力の世界を泳ぎ出す。あ、この静かな出だし、いいなあ。それを第1テーマとして展開するとこんな流れになるだろう。しかしそれは第2テーマの登場で切断されて、いきなりこんな展開に移っていく……というような膨らみが広がる。

それで家に帰って、ピアノで弾いてみて、それを楽譜に落とし込む。楽譜というのは、これ以上あり得ないほど純粋な論理力を持つツールであって、それによって作曲家の感性と想像力は万人に通用する言語として普遍性を得る。

で、後世の我々が受け取るのはその楽譜だけであって、その論理の塊を指揮者や楽団がどう直感力や想像力を働かせながら再現するかというのは、まさにインテリジェンスの領域で、上記の三角形がグルグル回ります。そして、客席で聞いている我々は、それをまさに純粋の音としてまずは直感的に受け止めて、それに触発されて想像力を働かせて感動して、最後には「この指揮者のベートーベン理解は凄い」とか「その割にはオーケストラがイマイチ付いて行っていないくて残念だった」とか、いくつかの論理的な結論を胸に刻みつつ帰途に着くのだろう。

今時の若い皆さんは、それなりの論理力は鍛えられていると思う。これを「論理力」と言うのは誉めすぎで、率直には「屁理屈は立つ」ということである。それに比べて「想像力」は乏しい。その大きな原因はテレビで、我々が子どもの頃には知的好奇心を満たしてくれるのは1に本で、2にラジオであった。その頃「アルプスの少女ハイジ」というラジオ番組を聞いたとすると、そのハイジがどんな風に可愛いかということは、皆がそれぞれ勝手に想像力を膨らませていて千差万別であったけれども、テレビドラマの時代になるとハイジの映像は予め与えられていてそれ以外の彼女を思い浮かべることは禁じられてしまう。

●想像力を拡張する方法

皆さん、論理力、つまり屁理屈をこねる能力はそこそこ鍛えられてい

るとして、それだけでは世の中、通用しない。

1つには想像力を鍛えるということで、それを私は、かつてのゼミでは「地理的＝空間的」と「歴史的＝時間的」な「ワーブ能力」ということを、いくつもの具体的事例を示して練習して貰った。

いま1つだけ端的な例を挙げると、日本列島というのは物理的＝地理的に見て長さ3000キロ。南の台湾に近い与那国島から鹿児島の大隅半島の先までが1000キロで、これは歴史的には「琉球」なのだ薩摩から福島までが1000キロで、これは「大和」。そこから北方領土の北西限までがまた1000キロで、これは「蝦夷」。で、皆さんが「日本史」として教えられてきた日本歴史は、実は大和史でしかない。蝦夷も琉球も明治早々に最終的に大和に屈服させられて、それから大和中心史観が横行するのだけれども、そのために皆さんを含め多くのヤマトンチューは沖縄が基地の問題であれほど苦しめられていてもほとんど関心を持たない、アイヌの人たちが何を訴えても耳を傾けない。皆さん、知らず知らずに「大和」イデオロギーの囚われ人になっているということだ。

とすると、まずは琉球、大和、蝦夷を全く対等な、物理的に1000キロずつの領域を分かち持つ歴史主体として認め、その相互作用としての日本列島史として自分の中で再構築しないと、日本とは何であるかが分からないということになる。

もう1つ、これが一番難しいのが、直感力を鍛えることである。しかも都会人には特にこの劣化が著しい。

五感とは、視る、聴く、嗅ぐ、味わう、触れるであるけれども、その五感がバランス良く働かなければ、その先にある「第六感」などあるわけがない。第六感は、「五感のほかにあるとされる感覚で鋭く物事の本質をつかむ心の働き」（広辞苑）である。

これを鍛え直すには、ともかくも「本物に直に接する」こと、「疑似代用品で済ませることを可能な限り回避する」ことではないか。

例えば、ロック音楽が大好きという人がいて、電車の中でも道を歩いている、イヤフォンでCDを聴いている。しかしその時に彼が使っているのは聴覚だけである。ロック（に限らず音楽）を楽しむというのはナマが本来で、ステージの間近にいれば、まず音自体も終わってしばらく難聴が治らないほどの激しさであるし。ステージには様々なライトが飛び交って目も鋭い刺激に晒されるし、歌手の唾や汗も飛んでくるし、興奮した聴衆が立ち上がって足踏みしたり踊ったりする振動も伝わってくる。それらすべてを全身で感じるのが「ロックを楽しむ」ということであって、CDをイヤフォンで聴くというのは代用品でしかない。

もちろん、毎日のようにロック・コンサートに行く訳にはいかないから、CDを聴くのはいいのだけれども、それは代償行為でしかないことを意識しておく必要がある。

また例えば、今の若い人たちは「賞味期限」を過ぎた食品を簡単に捨てる。ほんのしばらく前まではそんな表示はなかったので、臭いを嗅いで、舌先で舐めたり少しだけ嚙ったりして、食べて大丈夫かどうか自分で判断した。賞味期限表示に頼るということは、そのような感知機能をアウトソーシングさせることを通じて自分自身のそのような本能的というか動物的な嗅覚や味覚や触覚を限りなく劣化させていることになる。

●田んぼには裸足で入ろう

皆さんは昨日、田植えをして、たぶんここ自然王国の決まりで田植え足袋というものを履いて田に入ったと思うが、本来は裸足で入るのが正しい。

土は命の源である。土は、微生物の死骸の何億年に及ぶ堆積であり、そうであるが故に、生きた現役の微生物がそこで活動する豊かな生命圏でもある。皆さんが畑や田んぼの土を手で一握りすると、そこには約10億匹の微生物がいる。

私が裸足で田んぼに入ることをお勧めするのは、命の源である土の触覚を味わって貰いたいからである。しかも、足の裏は、漢方医学が教えているように、全身のあらゆる部位に繋がっている超敏感センサーである。

ところで、アランナ・コリー「あなたの体は9割が細菌」（河出書房新社、本誌16年3月13日号ブック欄参照）によると、その標題の通り、人間の体は、遺伝子レベルで言うと、ヒト自身が行っている機能は1割で、後は腸内フローラをはじめ様々な微生物が絶妙なるチームをなして行っているのだという。

とすると、生命の源である土の微生物と、人の体の9割をなす微生物とが、足裏を通じて会話し交流し、命の大切さを確認し合うということが、裸足で田んぼに入ることによって起きるのである。そのように触覚的に直感出来るようになれば、あなたの五感はだいぶ修復され、人間本来に少しは近づいたということである。▲（INSIDER No.888 より）

【受講生のレポートより】

=====

「半農半脳」という言葉を見て、最初はよくわかりませんでした。しかし、今や情報（Information）は自分から取りに行けば、どこにいても得ることができる。それをIntelligenceに変える力があれば、どこにいても戦うことができる。21世紀のライフスタイルは、そのようになるのかも、と考えさせられました。

=====

インテリジェンス（＝情報を集めて、整理した上で、仮説を立てて、実行・行動すること）はベーシックな動きであると感じている一方で、日常の仕事を振り返り、果たしてインテリジェンスある行動、思考が出来ていたのか、気づきを与えられる講義でした。

=====

私たち日本人のインテリジェンスの不足は今の社会生活において大きく影響を及ぼしています。自分たちで発信できない＝結局、大きな声を上げれる人の意のままに、そして、本当にそうなのか確認する声を揚げることもせずに物事が進んでしまう、そんな結果、今色々社会問題が起きている事実が多くある中、私たちは、このまま発言せずに、発信せずに流されていくことを続けていくのか。とても怖いことだと思いました。大きなことでないとしても、小さなことでも、好奇心を持ち、自らチャレンジし、発信していく。そんなひとつひとつの自分の行いを大切にしながら日々過ごして行こうと思います。

=====

「物事の本質を理解する」ことが重要だと指導を受けるが、それは「第六感」を身に付けることであると初めて理解した。同じような人たちに会い、机で仕事をしているだけでは「第六感」は鍛えられないと認識した。外に出る時は理由が無ければ駄目だと考えていたが、「五感」を鍛える為にはむしろ考えて動く必要が無いのではないかと思った。

=====

数年前から有機農法で育てた宅配野菜を購入し、水や肉や魚も出来るだけ気を使って選別する生活を送っていたら、今では添加物が入っている食品を食べると舌に違和感を覚えるようになっている。徐々に味覚が敏感になっている証拠だと思う。衰えた五感を取り戻し、心身共に健康に過ごしたいと改めて感じた。



大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.02

2017年5月22日発行（通算33号）

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 mura@ta2.so-net.ne.jp

153-0044 東京都目黒区大橋2-16-35

tel:050-3558-7527

mail:ookuma_school@stonesoup.tokyo